

みなさんは
どのような街に
住みたいですか

「時間的蓄積の多い街
～様々な年代の建物のある街に
いろんな世代の人が集う～」

2009 年度懸賞論文

東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻 修士 1 年
安藤達也

第1章 パリの街

パリのような街に住みたい、と強く思ったのは昨年の春のことだったろうか。初めてのヨーロッパにして、一番初めに訪問した街がパリで、なんてこの街は素敵なのだろうと思った。オシャレな雑貨店やブティックが軒を重ね、街のあちこちにオープンカフェがあり、昼間から道行く人たちがコーヒーやビールを楽しんでいるのもさることながら、なんといっても一番驚いたのはどちらを向いても存在感のある歴史的な建物があり、そこで日常生活が営まれていたことだ。歴史の中に街があるという感覚に襲われた。

パリの街で最後に改造が行われたのは、19世紀のオスマン帝の時代だから、少なくとも100年以上もの歳月の中これらの建物はここに立ち続けて街を見守ってきたと言うことになる。なかには中世から数百年以上も年月を経てきている建物もあるはずだ。その時間的スケールの大きさに圧倒された。

それでいて、全然時代遅れな感じではない。過去が現代と見事に混ざり合っている。日本でも古い建物が伝統的建造物群保存地区として保存されているところはあるが、そこは観光地化されてしまって、あまり普通の生活は見えなくなってしまうものだ。また都市にいたっては、古いものがそもそも極端に少なくなおさらだ。

歴史のない街はない。どの街だって、1日にして出来たわけではなく、そこに到るまでの過程があり、そこに住む人の物語がある。そしてそれらは代替不可能なものである。街の建物と同じものを別の場所にそっくりと並べて造ることはできるかも知れないが、だからといって同じ街がそこにできることにはならない。街の歴史も住む人の物語もこの世に一つしかないからである。街はそこにしかない独自のなものである。

その街の独自性を生み出しているのは、住む人の営みもさることながら、そこでの雰囲気、歴史的に積み重ねてきたものの蓄積ではないだろうか。その歴史的遺産を最大限に生かしているのがパリだ。パリでは見事に過去の遺産を生かして現在の生活が行われている。そしてパリに限らずヨーロッパの多くの街ではそれが当てはまる。

第2章 日本の街

(1)スクラップアンドビルドの街

ヨーロッパから帰って来て、改めて見る日本の街にもまた別の意味での衝撃を受けた。

日本のど真ん中、東京。建物がてんでばらばらであり街並みに統一感がないこともそうだが、建物の更新が早いので街並みが熟成することがない。街中でほとんど歴史を感じられなくなっている。

戦後一貫して、日本は過去をあまり顧みることなく成長一辺倒で進んできた。高度経済成長期、日本には次々と新しい高層ビルが建ち並んでいった。バブル期も次から次へと大規模開発が進んでいった。戦火をくぐり抜けてきた戦前の歴史ある建築も、多くがこの二つの時期で失われた。まだ使える建物も、そこに新しい高層のビルを建てた方が経済的に儲かる、と判断されれば躊躇なく新しい建物へと更新されていく。その様はスクラップアンドビルドと形容される。

数年ぶりにある街を訪れると、どこの街だか見間違えることもざらにある。私が子供の頃住んでいた所の近所のとある駅前では、かつては、低層の町屋が立ち並び300円くらいで食べられるそば屋や、駄菓子問屋街があった下町だったのに、今や問屋街などはきれいさ

っぱりとなくなり、高層ビルが林立する見間違えるような街になった。近年の再開発ラッシュがそのような状況を助長する。最近の再開発では、歴史をキーワードにかつてあった施設を復元する例もあるが、古いものを新たに復元することが主で、古いものを残して大切にしていこうといった発想は見られない。

もちろん西洋とでは石造建築と木造建築の文化の違いや、地震などの影響もあるのだろうが、それにしても変化が急激過ぎないだろうか。実際、我が国における「滅失住宅の平均築後年数」は約 30 年であるという。これはアメリカの約 55 年、イギリスの約 77 年と比較しても著しく短いのである。

なにも、古いものが全てよいものであり、保存して残していくべきだというつもりはない。この街には 100 年前からの建物がすべて残っている、と言っても手入れされておらずに雨漏りが多かったり、廃屋同然の家並みが広がっていたりしたのでは誰もが新しくそれらを建て直すことを望むであろう。

ただ、古い建物というのはその街にずっと建っていたわけであり、歴史の証人とも言える。建物は建った時代の様式を残していたり、時代毎に当時の社会背景による改変を加えたりしながら、今にいたるまで残っている。それだけの時間そこに存在したという証であり、そこには街の歩みの物語が今に刻み込まれている。しばらくその土地を離れていた人が、そこへ帰ってきて、変わらないその建物を見て「ああ、ここに再び帰ってきたんだ」と思うような、そんな街の人のよりどころにもなり得るのが古くからの建物である。

(2) 多様性のある街

先ほどは、東京はスクラップビルドの街だと嘆いたものの、ある時ふと気付く。東京にも古い建物が全くないわけでないのである。パリのように古い建物が連続して街並みを形成しているわけではないが、ちらほらと古い建物が点在している地区もまだまだ東京には残っているのだ。第二次世界大戦の戦火や関東大震災を免れた地区であるならばなおさらである。これは、今という時間の中に様々な時代を重層的に表しているといえ、その街が歴史を積み重ねてきた証であり、面白さである。日本では街並みの中に歴史性を感じることは少ないかもしれないが、どんな街にもその都市の歩んできた歴史があり、その過ぎ去った時間の痕跡は残されているのである。

前述のパリには街に蓄積している時間は長いが、一律に古いものばかりであると言えるかもしれない。日本は出来て 10 年も経たない建物もあれば数十年、時には 100 年以上も前からの建物が同じ地区に隣り合って建っていることもある。カオス的であると言ってしまえば、それまでだが、その多様性こそが逆に日本の街の特徴でありのかもしれない。

第3章 文京区本郷地区の実例

(1) 歴史の証人としての建物

実際に日本の街の多様性はいかような程か。その一例として文京区の本郷 6 丁目地区をみてみたい。本郷は東京の中心から北側に位置し、東京大学を擁する学生の街である。

本郷地区の南側は菊坂があり、樋口一葉がかつて暮らしていた家も残っていて、観光客も多く歴史性も感じられる所だが、こちらはそこからさらに北の方であり、観光客も少なく、ごく普通の地区である。それでも、街の小さい通りを歩くと、古い建物が点在してあ

ちこちにちりばめられているといった感じだ。

手始めに、実際に建物の年代がどのように分布しているのか、調べてみた。

調査方法としては本郷6丁目の地区で、比較的新しいものについては区役所の資料や住宅地図にあたり、さらに古いものについては、文京区の近代建築調査報告書ⁱⁱや住民への聞き込みによって調べた。約10年～15年程度の幅に切って、それらの年代を色分けで表示したものが下図である。これをみると、本当に様々な年代の建物が混ざっていることが分かる。

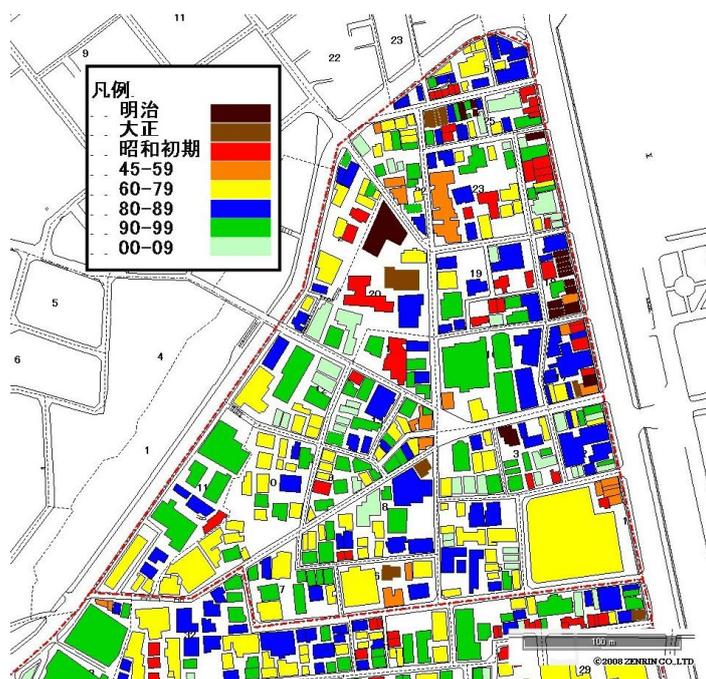


図1 本郷地区の建物の年代分布図(筆者作成)

様々な年代の建物は町の歴史の生き証人だと言ったが、年代を調べる過程で、その建物が出来た時代背景など様々なことが分かってくる。例えば、明治期から建っているいくつかの木造の旅館建築からは、かつての下宿屋で帝国大学のお膝元として多くの下宿する学生たちで賑わった当時をしのぶことが出来る。大正時代に建てられた文豪の旧家も残っていて、かつては文人・俳人の集った文化の地であった名残を残している。町の一角にはトタン葺きのバラックで出来た建物もある。本郷の一部の戦災被災地域では、戦後、資材不足の中、簡易的な住宅が多く建てられた。それらは一時的なものでほとんどのものはのちに建て替えられてしまったが、いくつかは地区内に例外的に残っているのである(写真1)。最近では大通り沿いに学生向けのワンルームマンションや、ファミリーマンションが建ち並ぶ。それらが複合的に重層する。



写真1 戦後直後のバラック建築
(筆者撮影)

このように街の建物からは、その街で起きた様々な出来事をたどることが出来る。

(2) 様々な年代の建物は多様な活動を生む

次に多様な建物があることで様々な活動が生まれることを見ていきたい。

『アメリカ大都市の死と生』ⁱⁱⁱによると、都市が多様性を持つためのいずれも欠かすことのできない4つの条件の一つとして著者は以下のようにあげている。

条件3: 地区というものは建てられた年代とその状態のいろいろ違った建物が混ざり合っていないと行かない。もちろん、その古い建物が秩序ある調和を持っているということも含めて。

ここでいう古い建物とは博物館にでも陳列されそうな古いものや復元するのに並々ならない頭と金を必要とするような状態の古い建物ではなくて、いくらかは荒れかけた古い建物もあろうが、質素でごく当たり前なあまり高価な価値があるとは言えない古い建物のことなのである。仮に都市に新しい建物しかないとする、そこに存在することのできる事業は新しい建築物にかかる高額な費用を保持することのできる人だけに限られることになる。そのため、大手のチェーン店などの店が多く入ってしまい、逆に個人経営の地元の雑貨屋さんや近所のバーなど小さい店はどんどん淘汰されていき、街の個性といったものが失われてしまう、という。街の多様性を生むためにも様々な年代の建物が街に存在することが必要なのである。

これは今から 50 年近く前に書かれた文章だが、今の時代にもよく当てはまっていると思う。そして本郷は様々な年代の建物があることで、いろいろな人が集い、いろいろなことが起こる場所になっている。

例えば、本郷には古い建物が多く、昔から商店を営んでいる住人の方も多し、木造のアパートにはあまりお金のない学生が多く集まってくる。一方で大通り沿いにはオフィスビルやマンションも建ち並び、サラリーマンや家族ずれの住人も多し。ワンルームマンションに住む学生もいる。自然と様々な人が集い、街に多様性を育む。

昔からの店の中には、かつて障子に貼る和紙を売っていた和紙専門店もある。昔からのなじみの客が店のおばちゃんに話しに来る一方で、若い人もふらっと入ってきて、和紙を買いに来ている。古本屋もそうだ。年配の大学教授がじっくりと居座っていろいろ買っていく一方で、ふと立ち寄って文庫本などを見ていく一般の人たち。古くからの商店街には地元詳しい人がいて、いろいろと街のことについて教えてくれる。

昔からの建物は、大学教授と学生の共通の話題にもなり昔はこの店はこうだった、などの話で盛り上がる。それも現在その場所が実際に残っているからこそである。

様々な年代の人が様々な年代の建物もとで集い、共通の街を実感する。このような街が私は一番の理想的な街だと思う。世代から世代へ、街での共通体験が引き継がれていく。街に蓄積している時間が大きいほど、引き継ぐべき共通体験も多いのである。

もちろん古いものだけではなく適度に新しいものも混じっていないと新しい交流は生まれにくい。最近の学生は古い下宿屋よりもワンルームマンションを好むので、下宿屋だらけの街では学生も集まらないだろう。古い下宿屋は宿泊施設へとうまく用途を替えて、街は歴史を紡ぎながら回っている。

第4章 時間的蓄積を持った街

ある街にいろいろな人が住んでいて、いろいろな建物があって、時間の経過と共に新しい人が越してきて、古い人は出ていってしまうだろうし、建物もどんどん建て替えられてしまうだろうが、それは自然の流れである。ただ、住む人や建物が変わっていても、街のイメージといったものがなくなってしまうわけではない。街の性質・アイデンティティというべき何か引き継がれるものだと思う。

街において変わらないものは、その場所にあるという固有の位置性、地形、などであるのだが、それ以外にもひとつ、街には時間の蓄積があり、その文脈を踏まえて街が徐々に変わっていくことがその固有性を育むことになるのではないだろうか。

私たちは普段から何気なく時間を捉えているものである。例えば人々は街に接しながら、街の様々な要素の中から、歴史性・古さを知らず知らずのうちに感じ取っている。建物に関してもそうだろうし、塀、木々、道路や、それらの複合した景観にも、街に流れてきた時間の蓄積を感じる。例えば、古びた石積みの塀に囲まれて、うっそうとした木々の茂る敷地の中に木造の下見板張りの住宅があればそれは戦前から続く古い建物だと思うだろうし、大通りにガラス張りの鉄筋コンクリート造の建物を見ればごく最近に建てられた建物であると思うだろう。そのような何気なく感じているものも街の固有性を担う重要な要素である。

そして時間の蓄積を減らさないためにも、街は緩やかに変わっていくべきものなのだと思う。例えば、1つの街区に築20年、40年、60年、80年、100年の建物があって、それでは一律に築50年を過ぎた古い建物は一新します、とするのではなく、まず老朽化で仕方なく築100年の建物を取り壊し、新しい建物にして、そのまま20年くらい時が経ってから、次にまた20年前に築80年で、今築100年になった建物を取り壊し、といったようにその時々建物の年代の分布があまり変わらないでいることが、歴史を脈々と伝える街となるのではないだろうか。再開発などあまりに大規模に街を更新すると歴史の文脈を失うことになってしまう。世代間でも共通の体験がなくなってしまう、同じ街に住んでいる実感が少なくなってしまう。

時間的蓄積のバランスを保ちながら徐々に更新することで街の個性、アイデンティティというものが保たれているのではないだろうか。3章で見てきたようにその継承する時間があるからこそ世代間のより活発な交流も可能になる。街のアイデンティティはそこに住む人の共通体験の受け渡しによって受け継がれて行く。

第5章 持続可能な社会の中での今後の街のあり方

そして、時間的蓄積の大きい街こそ持続可能な社会を目指す中での都市のあり方ではないだろうか。今までの街のあり方はあまりにも成長志向・進歩史観に支配され続けていた。新しい建物が良くて、古くなったらすぐ新しいものにする。常に新しいものになるのはいいが、過去と現代、未来で共有するものがなく、時代の流れを感じにくい。今が一番いいと思ってしまう。

きちんと過去から現在、未来へ受け継がれるものが残っている街は、今のものも（すぐ建て替えるのではなく）きちんと未来へ残していかないといけない、と自然に人々が思える。そしてそういうあり方こそ、持続可能な街のあり方なのだと思う。ただ、まずは現代の街が過去からいろいろと引き継がれてきた街であることがしっかりと分かる必要があると思う。何も残されてきていないのなら、次の世代にも何も残さなくていいものだと思うってしまう。

このような街を次世代に残して行くにはどうしたらいいのか。今までは都市を空間軸で捉えることが多かったが、これからは時間軸を含めて都市を捉える必要があると思う。文化財として保存するのも一つの手だが、文化財に指定するとそれは点だけの保存になり街並みを残せないし、何が何でもそれは残さないといけないという話になってしまう。保存と開発の中間に位置する緩やかな変化をうまく規定する枠組みが必要となってくる。

人々が古いものと新しいものが共存し、それでいて、過去にとどまっているのではなく新しい方向へ緩やかに変化していく街に私は住みたい。それはいうなれば大家族の中に住むような感覚なのかも知れない。祖父母がいて、両親がいて、子供たちがいて、兄弟も多く、いろいろな年代の人が皆で暮らす感覚。時代とともに緩やかに変化しながら互いに共同で生活することから、祖父母が経験してきた生活が両親に受け継がれ、それがまた子供に伝えられていく。そうして徐々にその街の家風とでもいうべきものが次の世代に伝えられていく。そんな街がこれからの街のあり方だと思う。

(6803 字)

i 最近 5 年間に滅失した住宅の新築後経過年数を平均した値。(住宅・土地統計調査(平成 10 年、15 年)による国土交通省推計値。新築住宅の平均寿命(最近新築された住宅があると何年使われるかの推計値)とは異なる。)

ii 文京ふるさと歴史館編、文京区近代建築(近代)悉皆調査報告書、1999

iii J・ジェイコブズ著、黒川紀章訳、『アメリカ大都市の死と生』鹿島出版界、1977